

## すみれ

池松 孝子

花の形が大工道具の「墨入れ」に似ていることから転じて「すみれ」になったという。山野に自生する堇はその可憐な姿に似合わず、たくましい花で都会のアスファルトの裂け目、歩道など身近な所でもよく目にする。

もう、四十年近くも前のことになる。幼稚園生だった娘を連れて比叡山に遊んだ。うかつにも比叡山山頂から京都市内に下りる最終バスに乗り遅れてしまった。仕方ない、琵琶湖側の坂本、大津へと下山することにした。

そのころ、天台宗の僧侶で比叡山延暦寺の千日回峰を満行した行者として知られる天台宗北嶺大行満大阿闍梨、酒井雄哉さんのドキュメンタリー番組が話題になっていた。それを覚えていた娘たちは自分も比叡山を駆けずり下りていくという「難行」に挑戦出来ると喜んだ。日没時間を気にしながらも、山道を滑ったり躓いたりしながら薄暗くなった頃、やっとの思いで坂本に着いた。親の不注意で山を下ることになったのに、なんと無邪気な子供達だろう。

その山道でたくさんの堇を目にした。背の高い木々の切れ目の少し明るい所に、ひとつそりと咲く慎ましいたずまいに家族四人は旅の疲れも癒された。後に知ったことだが、あの時の堇こそが「叡山堇」であった。和名はもちろん比叡山に生育することに由来する。日本固有種で、葉に大きな切れ込みがある。

以前、雨上がりの筑波山で足を滑らせて捻挫したとき、友人がお見舞いと田中澄江の「新・花の百名山」を送ってくれたことがあった。今回、思い出して読み返してみた。武州御岳山を代表する花としてこの叡山堇が紹介されている。あの時の「災い転じて」の比叡山下山を思い出した。

山路来て何やらゆかし堇草

芭蕉

「野ざらし紀行」に「この大津にでる道、山路をこへて」とある。天和四年に大和行脚に続いて京都から伏見をへて大津にいたる山道で詠んだものだという。まさにこの堇だった。堇は「万葉集」以来詠み続けられているが、多くは「春の野に」が定型だった。それを「山路来て」とした。ここに芭蕉の俳句を見る。